

吉松隆の「英雄」

原田慶太楼 (指揮)

Keitaro Harada, Conductor

東京交響楽団

Tokyo Symphony Orchestra

2023年3月11日(土)

14:00開演 13:00開場
16:00終演予定

東京芸術劇場 コンサートホール

2:00p.m., Saturday, March 11, 2023 at Tokyo Metropolitan Theater Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ／日本コロムビア

吉松 隆：鳥は静かに… op.72

Takashi Yoshimatsu : And Birds are still... op.72

吉松隆：鳥のシンフォニア
“若き鳥たちに” op.107

Takashi Yoshimatsu : Sinfonia in Birds 'for the birds of youth' op.107

キース・エマーソン&
グレッグ・レイク(吉松隆編曲)：タルカス

Keith Emerson & Greg Lake / Takashi Yoshimatsu Arr. : Tarkus

* * * * *

吉松隆：交響曲第3番 op.75

Takashi Yoshimatsu : Symphony No.3 op.75



原田 慶太楼 Keitaro Harada

欧米を中心に目覚ましい活躍を続けている期待の俊英。2021年4月東京交響楽団正指揮者に就任。シンシナティ響、アリゾナ・オペラ、リッチモンド響のアソシエイト・コンダクターを経て、2020年シーズンからサヴァンナ・フィルハーモニックの音楽&芸術監督。オペラでもアリゾナやノースカロライナ、ソフィア・オペラ等で活躍。2010年タングルウッド音楽祭で小澤征爾フェロー賞、13年B・ワルター指揮者プレビュー賞、米国シヨルティ財団キャリア支援賞6度受賞。09年キャットルトン・フェスティバルにL・マゼール の招待を受けて参加。第29回渡邊暁雄音楽基金音楽賞、第20回齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞。

kharada.com/ @KHconductor

東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra



1946年東宝交響楽団として創立。文部大臣賞をはじめとした日本の主要な音楽賞の殆どを受賞。川崎市、新潟市と提携し、コンサートやアウトリーチを積極的に展開する他「こども定期演奏会」等の教育プログラムも注目されている。新国立劇場のレギュラーオーケストラとして毎年オペラ・バレエ公演を担当。ウィーン楽友協会をはじめ海外公演も数多く行う。ITへの取り組みも音楽界をリードしており、2020年ニコニコ生放送でライブ配信した無観客演奏会は約20万人が視聴、2022年12月には史上最多45カメラによる《第九》公演を配信し注目を集めた。

音楽監督ジョナサン・ノットとともに日本のオーケストラ界を牽引する存在として高く評価されており、《サロメ(演奏会形式)》は音楽の友誌「コンサート・ベストテン2022」で日本のオーケストラとして最高位に選出された。



吉松 隆 Takashi Yoshimatsu

1953年(昭和28年)東京生まれ、まもなく70歳。作曲家。少年時代は手塚治虫のような漫画家か、お茶の水博士のような科学者になろうと思っていたが、中学3年の時に突然クラシック音楽に目覚め、慶應義塾大学工学部を中退後、一時松村禎三に師事したほかはロックやジャズのグループに参加しながら独学で作曲を学ぶ。1981年に「朱鷺によせる哀歌」でデビュー。以後いわゆる「現代音楽」の非音楽的な傾向に異を唱え、調性やメロディを復活させた「新(世紀末)抒情主義」および「現代音楽撲滅運動」を主唱、交響曲6曲や協奏曲10曲を始めとするオーケストラ作品を中心に、〈鳥のシリーズ〉などの室内楽作品、〈プレイアデス舞曲集〉などのピアノ作品のほか、ギター作品、邦楽作品、舞台作品など数多くの作品を発表する。1998年からはイギリスのチャンドス(Chandos)とレジデント・コンポーザーの契約を結び、6枚のCDが録音される。最近ではキース・エマーソンの作品「タルカス」をオーケストラ用に編曲し大きな反響を受けた。また2009年映画太宰治原作「ヴィヨンの妻～桜桃とタンポポ～」の作曲を監督の根岸吉太郎氏の指名により手掛け、日本アカデミー賞優秀音楽賞を受賞。2003年放映TVアニメ「ASTROBOY 鉄腕アトム」の音楽も担当。2012年放送NHK大河ドラマ「平清盛」の音楽を担当。評論・エッセイなどの執筆活動のほか、イラストレーターとしても活躍中で、著書に「図解クラシック音楽大事典」(学研)、「夢みるクラシック交響曲入門」(筑摩書房)、編著書に「クラシックの自由時間」(立風書房)、また自伝「作曲は鳥のごとく」(春秋社)などがある。2013年3月20日には幻のデビュー作から大河ドラマ「平清盛」までの作曲家・吉松隆60年の集大成「吉松隆還暦コンサート『鳥の響展』」を東京オペラシティで開催、高評を得た。

オフィシャル・ホームページ <http://yoshim.music.coocan.jp/>
楽譜販売はこちら <https://asks-orch.com/shop/>
音楽配信情報ははこちら <https://linktr.ee/yoshimatsutakashi>

音楽ライター：小室 敬幸

シンフォニスト

来週3月18日、吉松隆は古希(70歳)を迎える。14歳の頃に交響曲作家を志したことが作曲家としての原点で、これまでに1990年の第1番《カムイチカブ交響曲》から2013年の第6番《鳥と天使たち》まで、6つの交響曲を生み出してきた。だがナンバリングはされていないが、他にも交響曲“的”な作品があることをご存知だろうか？ 例えば《鳥獣保護区》Op. 4(1976)、《朱鷺によせる哀歌》Op. 12(1980)、《ドーリアン》Op. 9(1979)は最終的に個別の作品となったが、それぞれの楽想をもとにシンフォニーに仕上げて“交響曲第1番”となる構想があったというし、「鳥の三部作」の完結編にあたる《鳥たちの時代》Op. 25(1986)も20分に満たない短さでなければ“交響曲第2番”になる可能性があったようだ。

鳥は静かに… Op. 72 —— 《朱鷺によせる哀歌》を90年代様式に

こうした《カムイチカブ交響曲》以前の「80年代様式」について作曲家自身の解説をもとに少し解きほぐしてみると、前衛音楽における“12音からなる半音階”を“7音からなる「モード(旋法)」”に置き換え、モードで書かれたフレーズを「レイヤー構造」で編み込むことにより生まれる浮遊感のある「サウンド(音響)」が特徴だった。その最たるものが出世作《朱鷺によせる哀歌》である。

それに対し、《カムイチカブ交響曲》以降の「90年代様式」では時代が進むほど、80年代の浮遊感のあるサウンドから、明快な「ビート(律動)」を志向するように変わってゆき、構成面ではグラデーションのように音楽が移り変わっていくことよりも、「ブロック構造」で積み上げられるコントラストがはっきりした「フォーム(形式)」が増えていく。

こうした様式変化のなかに位置づけてみると、前衛音楽のような複雑な譜面(ふづら)とシベリウスのサウンドが出発点となった《朱鷺によせる哀歌》(1980)から、現代音楽的な書法による噛み合わない縦のリズムを取り除き、中間部に息の長いメロディを登場させたのが《鳥は静かに…》Op.72(1998)だったと捉えることも出来るだろう。

鳥のシンフォニア(若き鳥たちに) Op. 107 —— 10代で思い描いた理想の音楽

交響曲第5番(2001)から第6番《鳥と天使たち》(2013)のあいだ、次なる交響曲の在り方に悩むなか、仙台ジュニアオーケストラ設立20周年記念として委嘱されて生まれたのが、「交響曲第6番」になる可能性もあった鳥のシンフォニア(若き鳥たちに) Op. 107(2009)だ。シンフォニアとは伊語における交響曲を意味する単語だが、日本では古典派以前の交響曲をあらわす際に使われることもある。そこから吉松は「若い交響曲」というニュアンスを込めてこのタイトルを付けた。

第1楽章「prelude(前奏曲)」では、楽譜に音符は書かれているものの「自由に」と指示されており、様々な楽器によって鳥の鳴き声を受け継がれていく。大空を翔びながら歌を奏でる「鳥」は、吉松にとって自由と音楽の象徴だ。第2楽章は「toccata(トッカータ)」と題されているが、

スケルツォ的な性格も持った音楽。一貫して4分の4拍子だが、小節を跨ぐようなフレーズによって窮屈さは感じない。ブルースやジャズといった大人っぽい音楽を取り入れた第3楽章「dark steps (暗いステップ)」、吉松が私淑してきたシベリウスへの敬慕が感じられる第4楽章「nocture (夜想曲)」を経て、第5楽章「anthem (賛歌)」では吉松が交響曲作家を志すきっかけとなったベートーヴェン《運命》のリズムが織り込まれたハ長調の音楽が高らかに鳴り響く。

タルカス —— 夢見続けたオーケストラで鳴り響くロック

先に触れたように、《ドーリアン》をフィナーレに据えた交響曲が第1番になる可能性もあったそうだが、その頃の吉松が温めていたアイデアが、プログレッシヴ・ロック(以下 プログレ)のような音楽をオーケストラでやりたいというものだった。吉松にこうした「シンフォニック・ロック」を志向させた要因のひとつが、ELPの《タルカス》であったことは間違いないだろう。

ファーストアルバムでバルトークやヤナーチェクをカバーしたプログレを代表する3人組バンド、エマーソン・レイク&パーマー(通称 ELP)。《タルカス》は彼らが1971年にリリースしたセカンドアルバムの題名にもなった、LPレコードのA面丸々を使って収録されたタイトルチューンである。全7曲で構成された20分ノンストップの組曲で、作曲家エマーソンの想像力によって生み出された神話的な怪物タルカスが主人公。火山の「噴火」(第1曲)から生まれ、「マンティコア」(第5曲)などの敵を倒したり、破壊の限りを尽くして最後は「アクアタルカス」(第7曲)となって海へと還っていく……という物語がイメージされている。東京フィルハーモニー交響楽団が2010年3月に主催した「新・音楽の未来遺産」という企画内容にあわせて、吉松自身が編曲を提案したことで管弦楽版が実現した。なお本日3月11日は、2016年にこの世を去ったキース・エマーソン氏の命日である。

交響曲第3番 Op. 75 —— 《英雄》ではなく《運命》

副題こそ付いていないが、ヒロイックで巨大であることから作曲者自身は交響曲第3番 Op. 75 (1998)からベートーヴェンの《英雄》を連想したと述べている。それ故に本日の公演名が「吉松隆の《英雄》」となっているわけだが、敢えて異論を申し上げたい。ベートーヴェンの交響曲は第1～2番において先人ハイdnやモーツァルトを規範にしていたのに対し、突如として第3番《英雄》で拡大路線を取り、その後の自らが歩んでいく道筋を示してみせたのだ。そう捉えれば、まだ現代音楽業界の顔色を窺っていた節のある「80年代様式」ではなく、「90年代様式」へと足を踏み入れた《カムイチカブ交響曲》こそが吉松にとっての《英雄》であるはずなのだ。

そして交響曲といえども、様々な要素を盛り込んだ組曲のような性格をもつ第1～2番に対し、この第3番は明確にドイツの古典派～ロマン派に倣うかのように4楽章制で、少ない主題を変奏しながら全体を組み上げていく。つまり拡大ではなく凝縮路線を取った作品なのであり、ベートーヴェンでいえば第5番《運命》にあたるはずなのである。

第1楽章「アレグロ」は、自由なソナタ形式。冒頭の不協和音に続いてオーボエが奏でる素朴な

主題が、その後に登場する多くの旋律の原型となるので非常に重要だ。テンポアップする主部で繰り返される激しい第1主題も、そのひとつである。ピアノとヴィブラフォンが主導する第2主題を経て、第1主題と序奏主題が絡み合いながらピークを迎えると、序奏の雰囲気に戻ってくると展開部に。再びテンポが早くなる再現部と、徐々にテンポが落ち着いていく終結部を経て、最後は序奏主題と第1主題が断片的に回想される。

第2楽章「スケルツォ」は短い序奏の後、チェロが伴奏音形を奏するところから主部となる。第1楽章に登場したリズムや旋律に変奏を加えて投入することで、統一性と多様性を両立しながら、次々と新しいメロディとリズムを生み出してゆく。最後に短く、主要な主題だけ回顧される。

第3楽章「アダージョ」は2部構成。第1部は三部形式で、主部は第1楽章冒頭の不協和音とチェロのレチタティーヴォが交代してゆき、中間部は教会旋法的なクラーターの後、徐々に第1楽章の序奏主題などの旋律が重ねられていく。打楽器の暴力的なサウンドで前半が終わり、静かに5拍子のリズムが刻まれ始めると第2部となり、悲しげな旋律が繰り返されながら盛り上がりつつゆく。

第4楽章「フィナーレ」も2部構成。第1部は、弦楽器が第3楽章終わりのメロディを簡素にした音形を、木管楽器が第1楽章の序奏主題を奏でるところから始まる。そして第1～3楽章の要素を展開部のように自由に再構築しながら振り返ってゆく。第2部はチェロの低音の上で、木管楽器が明るい雅歌を歌いはじめる。その雰囲気になびいて第3楽章後半の悲しげな旋律も輝かしく変貌を遂げ、5拍子の力強いリズムによって我々を問答無用で祝祭に巻き込んでゆく。本日で東日本大震災から丸12年—— 私たちもこのような活気のある未来を諦めることなく目指し続けたいものである。